わが国における自然公園利用者のリスク管理プロセス構築上の課題

小林　昭裕*

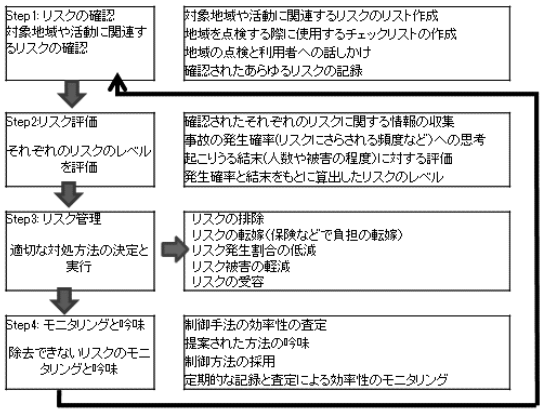
* 専修大学

はじめに

国立公園では利用の量的増大や多様化の進展、利用ルールの欠如とあいまって､過剰利用や無秩序利用により、自然環境への悪影響だけでなく、事故や危険性の増大、自然体験の劣化が懸念されている。ある程度の冒険、日常生活からの脱却、素晴らしい自然との邂逅を求めて人々は自然公園を訪れる。皮肉にも、人々をひきつける自然の高い質が、人々をリスクにさらす恐れがある。世界的に見ても､より深い自然体験を求める利用者の欲求、法的側面での自由利用、健康や安心を背景としたリスクに対する社会的関心の高まりという矛盾に自然公園管理は直面している。本研究では，自然公園での野外レクリ―ション利用におけるリスク管理に関し，既往研究や調査報告で確認されているリスク管理プロセスを基に，我が国における自然公園利用者のリスク管理プロセスの構築にあたっての検討課題について考察した。

１．解析データおよび解析方法

自然公園における利用者のリスク軽減を図るうえで重要なことは，利用者のリスク管理に関わる様々な主体間の連携を図ると同時に，リスクに関与する要因が自然環境のみならず，社会環境を包含することから，多角的・総合的アプローチを図らなければならない点である。海外で既に導入されている利用者リスク管理の構造的プロセスとして「リスク確認」⇒「リスク評価」⇒「リスク管理」⇒「モニタリング」において(図―1)，「リスク確認」⇒「リスク評価」に関する問題解決が優先することから，次の3点を課題として設定した。



図－1　オーストラリアやカナダにおけるリスク管理の構造的プロセス

①「リスク確認」に関して，リスクの発生に関わる要因は，地域毎，季節毎に異なる点に配慮した項目リストの設定，情報ソースの選定，因果関係の推定が求められる。現状では,「リスク確認」に関する情報収集は個別案件の列挙にとどまっており,体系的に構築されていない。

②リスクの軽減には管理者だけでなく，利用者，事業者などの利害関係者の連携協働が欠かせないため，「リスク確認」では，信頼構築の基盤である科学的知見を情報公開し，利害関係者間でのリスクに対する正しい共通認識が不可欠である。しかし，科学的知見自体が不足しており，通常の管理行動や業務の中で，科学的知見の不足を補う仕組みづくりが求められている。

③「リスク評価」では「リスク確認」で得た情報を基に，リスクのシナリオ，受容範囲を設定する必要があるが，自然公園内で大勢の利用者が訪れる一般観光地と，利用者にとって一定のリスクを包含する自然環境の懐深く徒歩で立ち入る場所など，異なる立地環境の特性を前提とした（小林,2011），利用者集団のレベルやニーズに応じたリスク管理が求められている。

また、「リスク確認」に必要なリスト項目に対する体系的な理解、および「リスク評価」に関与する要因の解明を並行して進める必要がある。したがって、「リスク確認」で得た調査結果を現場のリスク管理に携わる関係者との情報交換を通じて、それぞれの地域が抱えるリスクに対応した「リスク評価」手法の構築に寄与できるよう調査を進めることが、実務上の利用者リスク軽減を図る進めることが適切と考えられる.

引用文献

小林昭裕（2011）管理上の視点からみた自然公園のレクリエーション利用におけるリスク管理に関する考察，ランドスケープ研究 74 (5),537-542.